



Data 2022-145

監督：三宅唱
 原案：小笠原恵子『負けないで！』
 脚本：三宅唱、酒井雅秋
 出演：岸井ゆきの／三浦友和／三浦誠己／松浦慎一郎／佐藤緋美／中島ひろ子／仙道敦子／中原ナナ／渡辺真起子

👁️👁️ みどころ

耳が聞こえないことのハンディはどこに？それは第94回アカデミー賞で作品賞、助演男優賞、脚色賞を受賞した『コーダ あいのうた』（21年）を見ればよくわかるが、ケイコはボクシングに、しかもプロの女子ボクサーにチャレンジ！それは一体なぜ？

そう聞くと、一瞬「スポ根モノ」の展開が思い浮かぶが、本作はそこではなく、「目を澄ませて」のサブタイトルに注目！試合での勝利や物語の起承転結よりも、ケイコの生きざまに集中！

近時、息子の歌手としての活躍が目立っているが、既に老境（？）に達してきた俳優、三浦友和が本作では実にいい味を出しているので、主演女優賞モノの岸井ゆきのと共に、その助演男優ぶりに注目！

—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*

■□■聴覚障害の女の子がボクシングを！それは一体なぜ？■□■

視覚障害者を主人公にした面白い映画には、古くはオードリー・ヘップバーン主演の『暗くなるまで待って』（67年）、近時は、中国、韓国合作映画『見えない目撃者』（15年）（『シネマ37』190頁、『シネマ44』278頁）や、その日本版たる『見えない目撃者』（19年）（『シネマ45』191頁）等があった。それに対して、聴覚障害者を主人公にした映画は少なかったが、第94回アカデミー賞で作品賞、助演男優賞、脚色賞を受賞した『コーダ あいのうた』（21年）（『シネマ50』12頁）で、コーダ（CODA）とは「Children of Deaf Adults」の略語で、「ろう者の親を持つ子供のこと」、ということが全世界に知れ渡った。

私は知らなかったが、篠田博之氏のブログサイトによると、「この映画の原案は私が編集した創出版刊『負けないで！』で、聴覚障害でありながら正式にプロボクサーになった小

笠原恵子さんの自伝だ。映画はこの本の第8章をもとにしたもので、多くの若い人たちが抱える将来への不安や葛藤を、三宅監督が独特の映像表現で劇映画にしたものだ」と書かれている。そして、チラシに「世界中の映画祭で絶賛！！」と書かれている通り、想定外の(?)大成功を収めたのが本作だ。

私も読んだが、2022年12月16日付日経新聞夕刊「シネマ万華鏡」で、映画評論家の中条省平氏が「本年掉尾を飾る傑作である。私にとっては、今年の日本映画ベストワンだ」と書き、さらに「一見、障害者とスポ根という題材の取りあわせに見えて、その両方の要素を入れつつも、ごく普通の人間のドラマとして、単純、正確、潔く描いている点が素晴らしい。その意味で、私たちにも生きる勇気を与える稀有の率直さにあふれている」とまで書いたこともあって、その人気はおとろえないらしい。

満席ではなかったものの、劇場はほぼ8割の入り、パンフレットも売り切れだからすごい。異例の大ヒット、ロコミで評判が広がり、上映館が続々拡大しているそうだが、そんな本作の魅力は一体どこに？

■□■目からの情報 VS 耳からの情報。その実態は？■□■

『暗くなるまで待って』のポイントは、家の中に侵入してきた殺人者に対して視覚障害者の女性がいかに立ち向かうか、だったが、その解答は電灯をすべて切ってしまうこと。つまり、真暗闇なら健常者も視覚障害者も対等ということだ。また『見えない目撃者』というタイトルを聞いて、私は当初、どう考えても自己矛盾だと思ってしまった。だって、見えないことと目撃者とは完全に対立する概念だから、見えない目撃者なんてあり得ない。そう思っていたが、いやいや、同作を見て、なるほど、なるほど・・・。

そんな映画を見て、健常者の頭の中であらためて、目からの情報 VS 耳からの情報を考えてみると、要するに、聴覚障害者は視覚をはじめ、手話等による豊かなコミュニケーションの能力は優れているということだ。私は『ケイコ、目を澄ませて』というタイトルの意味が当初わからなかったが、そんなことをよくよく考えてみると、納得！

本作冒頭、ミット撃ちの音をはじめとするさまざまな音が響いてくる。私たち健常者は普段、何気なくそれらを聞いているが、ケイコにはこれが全然聞こえていないわけだ。もしそうになると、聞こえない耳に代わって、目を澄まさなければ！まして、耳の聞こえない女の子が、プロボクサーになることを目指すのなら、なおさら、目を澄まさなければ！

■□■ストーリーや起承転結よりもケイコの生きざまに集中！■□■

「ボクシングもの」は、『ロッキー』シリーズをはじめとして名作が多い。また、「スポ根もの」の代表は野球をテーマにした『巨人の星』だが、ボクシングをテーマにしたものの代表は『あしたのジョー』だ。それらの名作では、貧しい環境の中で孤独な練習を続け、やっと掴んだ晴れの舞台で、とことん打ちのめされながら最後に大逆転、そんなストーリーが定番だし、『ロッキー』第1作のラストでは、勝利の瞬間、「エイドリアン！」と叫ぶロッキーの姿が強烈だったから、夫婦愛というテーマも観客の胸に突き刺さった。ボクシ

ングもの名作はそんなふうによく多くの観客を納得させてきたが、さて本作は？

そんな期待を持つと、きっと本作では裏切られるだろう。たしかに、本作にはケイコがシャドーボクシングに励む姿が何度も登場するし、リング上での対決も登場するが、そもそも本作はボクシング映画と言えるの？そんな疑問が湧くほど、本作はストーリー性や起承転結にこだわらず、ケイコという聴覚障害の女の子の生き方という一点に焦点を絞っている。山崎樹一郎監督の第3作目で世界的な評価を得ている『やまぶき』（22年）と同じく、本作も16ミリカメラでの撮影だが、本作に見るその映像の魅力は『やまぶき』と同じだ。今ドキの日本のTVドラマは綺麗な画面ばかりが目立つ薄っぺらなものが多いが、本作のスクリーンはその対極にある。ドラマ性を求める人にはあまりお勧めできないが、本作ではそれ以上にケイコ（の生きざま）に集中！

■□■岸井ゆきのは主演女優賞もの！その“揺れる想い”は？■□■

岸井ゆきのの主演で話題になった『愛がなんだ』（19年）を観ていないので、私は女優、“岸井ゆきの”を本作ではじめて見た。私の目には決して美人とは見えないが、ジムのトレーナーとの間で彼女が演じるコンビネーションミットの演技にビックリ！一人で黙々と繰り返すシャドーボクシングだけでは素人にはその進歩ぶりはわからないが、スクリーン上で数回繰り返されるコンビネーションミットの姿を見ていると、その進歩ぶりがよくわかる。健常者がろう者を演じること自体が難しいだろうに、ろう者のボクサーとして、よくここまでケイコ役になりきった女優、岸井ゆきのに拍手！

私は今は亡き坂井泉水がボーカルを務めていたZARDが大好き。昔から東京出張のたびに新幹線の車内でそのアルバムを聴いていた。そんな私は、昨年10月に観た『プリンセス・ダイアナ』（22年）（『シネマ51』76頁）の主題歌にZARDの『Forever you』が使われているのを知った後、4枚組のCDアルバム『ZARD Forever Best ～25th Anniversary』を購入した。ZARDの曲をカラオケで歌う男性は少ないが、私はその貴重な一人だ。そして、私が最もよく歌っていたのが『揺れる想い』だ。

同曲はまさに若い女性の感性から生まれた恋（彼）に対する“揺れる想い”を歌った名曲だが、本作では生まれつき耳の不自由な女性ケイコのボクシングに対する“揺れる想い”がよく伝わってくる。彼女がボクシングの選手を目指したのは、なぜ？あそこまで黙々と孤独な練習を続けられるのは、なぜ？そして、せっかく公式の試合で勝利したにもかかわらず、会長が経営するジムが閉鎖することを聞いて、ボクシングをやめようと思ったのは、なぜ？さらに会長の奔走によってやっと実現した大手ジムへの移籍を無下に断ってしまったのは、なぜ？

ジョルジュ・ビゼー作曲の最も有名なオペラ『カルメン』では、“炎の女”カルメンは、「風の中の羽根のようにいつも変わる女心」と歌われていたが、ケイコの心もなぜ羽根のようにコロコロと変わっていくの？本作では、ケイコのそんな心の中を覗き込みながら、女優、岸井ゆきのの主演女優賞ものの演技に注目したい。

■□■三浦友和も助演男優賞ものいい味を！■□■

他方、本作の評価を高めるうえで見逃すことができないのは、ボクシングジムの会長役を演じる俳優、三浦友和の演技力と存在感だ。山口百恵と共演していた若き日のハンサム（なだけ？）の三浦友和とは一味も二味も違う彼に注目したい。『唐人街探偵 東京MISSION（唐人街探案3 / Detective Chinatown 3）』（21年）（『シネマ49』255頁）では、コミカルな味も交えながら、背中に入れ墨をやけに強調したジャパニーズヤクザのボスとしての存在感を見せてつけていたが、本作ではそれとは全く異質な、ボクシングジムの会長としての圧倒的な人間力の魅力（あり方）を見せてくれるので、それに注目！

再開発が計画されている東京の下町でボクシングジムを経営することは、戦後の混乱期や昭和の時代ならともかく、バブルを経て平成の時代に入った後は困難を極めるのは、当然。再開発計画に乗ってビルの一室に移転することは可能だろうが、そもそもこの会長に後継者はいるの？そんなジムの経営問題（後継問題）を含めて、ボクシングジムの会長としての苦悩と、そこで女性プロボクサーを目指すケイコとの間で展開される心の絆をしっかりとらしてみたい。健康状態に不安を持ちながらジムの経営を続けてきた会長が突然倒れてしまった時には、いよいよこのジムも終わりと思ったが、なんとかか少しづつ回復。しかし、それを契機にジムの閉鎖を決めた会長が、トレーナーたちの次の職場、ケイコたち選手の次のジムを探すのに奔走する姿は今時珍しい。会長のそんな努力が報われ、プロボクサー、ケイコの移籍先も決まりそうになったが、さてそこでのケイコの決断は？

前述したとおり、本作は『ロッキー』や『あしたのジョー』のような“ボクシングもの”ではなく、あくまでケイコの生きザマを描く映画。したがって、そんな本作には、『ロッキー』や『明日のジョー』のような劇的なフィナーレは訪れない。しかし本作では、岸井ゆきのの主演女優賞ものの演技と、三浦友和の助演男優賞ものの演技を味わいながら、本作の良さをしっかりとらしてみたい。

2023（令和5）年1月17日記

追記 第96回キネマ旬報個人賞で主演女優賞と主演男優賞をゲット！

1) 本作で耳の聞こえないボクサー役を演じた岸井ゆきのが、第96回キネマ旬報個人賞で主演女優賞を、ボクシングジムの会長役を演じた三浦友和が助演男優賞をゲット！さらに、監督の三宅唱も、読者選出日本映画監督に選ばれた。おめでとう！

2023（令和5）年4月10日記